

夏の経済教室(大阪中学対象)記録

- 1 日時 8月13日(水)9時30分～16時00分
- 2 場所 大阪取引所4階 OSEホール
- 3 参加人数 82名(関係者含む)
- 4 主な内容:進行 行壽浩司(美浜町立美浜中学校)

(1)「JPXの最新の動きと金融経済教育の取組み」

斎藤史貴氏(東証金融リテラシーサポート部)より報告

JPXの役割や最新の動向、金融経済教育への取組み、授業で活用できる教材の紹介

- ① 質疑:大阪取引所は東証に吸収されたが、なぜ福岡などの地方はまだ残っているのか。

→明確な理由というものはないが、地域に密着し、地域の企業に寄り添いながらよりよい地域経済になるようにしている要因もあるのではないかと。

(2)「社会科が苦手な生徒に経済を教えるには」

佐藤英司先生(福島大学経済経営 学類経済学コース 准教授)より提案

1. 「暗記嫌い」で社会科が苦手 →「暗記学習」からの脱却
2. (どの教科であれ)勉強が嫌い →興味を持ってもらう工夫
3. 難しくて考えるのが嫌い →身近で具体的な状況で考える

以上の3点を意識し、経済分野の授業のあり方を提案した。ラーメン店経営を教材とし、概念的知識の習得と深化を意識した授業であり、ラーメン店経営を通して分業や流通といった経済分野にて学んでほしい概念を学ばせる。また労働について、公民的分野の見方・考え方の一つである「効率・公正」を踏まえ、「市場の考え方=効率性の追求」と「共同体の考え方=人間の尊重(公正)」とのバランスについて考えさせ、それを社会的課題につなげて深める授業を提案した。

質疑

Q1 経済と選挙について個人の意識形成をどうしたらよいか?

→経済的損得感と選挙における一票の影響について論じ、個々の合理的行動(ミクロな視点)だけを考えれば投票は「損しかない」と一見考えられるかもしれない。しかし、一票の積み重ねが社会を変えること、そして学校現場では投票の是非よりも、学生が自ら「何がいいか」を考えられるようになることが重要であると強調し、授業での議論のきっかけ作りを目的としている。学生に主体的な思考を促すことの重要性を改めて示した。

Q2 大学入試対策と探究学習の切り分けは?

→授業内容が直接的な大学入試対策に限定されず、どのような子に成長してほしいかを

重視した探究学習の方向性が議論された。試験はアウトプットの結果であり、インプットとアウトプットは異なるため、学んだことをどう生かすかの訓練は別途必要であると説明。入試対策と授業の目的を明確に切り分ける必要性が述べられた。入試対策は別途対応すべきであり、授業自体は学生の探究心を育み、社会で生きていく力を養うことに重点が置かれるべきとの見解が示された。

Q3 ラーメン店を題材とした経営実務の学びはどう理解するか？

→ラーメン屋の経営例を通じ、実務的な経営戦略や流通、地域特性の活用について議論された。具体的には、日高屋が 390 円から 420 円に 30 円値上がりした事例から原価構造やコスト削減（自家製麺の有無など）の重要性が、また山岡家が長距離ドライバー向けにシャワー室を提供し、国道沿いなど郊外に出店することから立地の重要性やターゲット設定が語られた。福島県や喜多方ラーメンを例に地域おこしや観光との関連性も触れられ、当初はグローバルな取引との関連も意図されていた。

講演者（佐藤先生）は、ラーメン店を題材とすることは実務例として有効であるとしつつも、日本経済や景気との結びつきの難しさを反省点として挙げた。また、生徒の反応を見ながら、ゲーム業界など他の題材も検討できるとの見解を示した。

（3）シンポジウム 河原・奥田授業から経済の授業づくりを“たくさん”学ぶ！

河原和之（立命館大学 非常勤講師） *当日登壇が叶わず、新井明先生が資料説明
奥田修一郎（高野山大学文学部教育学科 准教授）
玉木健悟（奈良県川西町三宅町式下中学校組合立式下中学校 教諭）
関本祐希（大阪府立市岡高等学校 教諭）
前半は、4名のシンポジストによる授業づくりの提案が行われた。

○報告：日常の世界から科学の世界へ～すべての子どもが意欲的に学ぶ経済の授業～

河原和之先生（新井明先生が資料説明）

河原先生の教員の原点は、東大阪の中学校での生徒との出会いであり、「生徒を見放さない、捨てない、一人を最後まで認める」という教育理念がスタートである。「経済単元 30 時間の授業」を紹介し、「キャラメル溝」「聖火リレーのルート」「フィレオフィッシュ」などの具体的な授業ネタから、河原実践の面白さ、生徒の興味関心をひく授業展開の作り方などについて解説。河原流経済単元の授業づくりのポイントとして

- (1) 「科学する」ことの楽しさ、つまり学ぶことの“喜び”を体感させる。
- (2) 社会のしくみを“経済のフィルター”を介して、経済的見方・考え方を習得し社会事象を分析させる。
- (3) さまざまな経済事象を多面的・多角的に分析・検証しつつ、価値判断する。
- (4) 多くの異見に出会い、検証しつつ、意見形成をおこなうことで、多角的多面的な認識が育つ。

(5) 意思決定を、教師の押し付けではなく、生徒同士の“対話”を通じて考察させる。
という5点があることを強調された。

○報告：河原先生から経済の授業づくりを「たくさん」学ぶ！

玉木健悟先生

河原実践の特徴は(1)「知的興奮」と「科学すること」の面白さを体感できる、
(2) 生活に根ざした世の中の「なぜ」に対して考え、そのしぐみに迫ることができる
の2点であるとし、「見えるもの」(生活)の背景の「見えないもの」(概念)を探究する学習
であると説明。

授業では具体的な身近な話題(例：機会費用、大阪から東京への移動手段)を多く用い、
そこから概念に迫る。また、円高円安ゲームのように、ゲームを通して楽しく学ぶ工夫が
されている。河原流ネタづくりは圧倒的な読書量と行動力、観察力(アンテナ)であると
した。導入(ネタ)→展開(概念)→導入(ネタ)→展開(概念の応用)といったような
授業展開により、即座に概念を適用することで、難解な経済概念が生徒に浸透すると説
明した。

○報告：米高騰の黒幕(真犯人)は誰だ？ 流通の仕組みとは お米の適正価格とは
奥田修一郎先生

河原和之氏との出会いが、教師として続けるきっかけとなった。河原氏から研究会への参
加・発表を勧められたことが大きな転機。

30年間の実践を通じて「学力差のないネタから社会の仕組み」へのアプローチを重視。
学力とは何か、合理的配慮やインクルーシブ教育の必要性について議論。リアルタイムの社
会事象を授業に取り入れる重要性を強調した。

授業設計では、クイズやワークショップを活用し、主体的な学び・探究を促進。品種改良
や米作りの要素、家計支出の統計など具体的な教材例を紹介。その中で、農業学習の難しさ、
現場体験の重要性を指摘。農業人口の減少や流通の実態、価格決定の仕組みなど、現実の農
業をめぐる課題を教材化した。農業現場の取材や消費者視点の聞き取りの困難さ、資料作成
の重要性を強調。また統計資料の読み取りや、現場の定義の曖昧さにも言及した。米の価格
高騰の原因や流通構造の複雑さについて、参加者間で意見交換。犯人探しの不毛さ、全員が
関与している可能性など多角的な視点を提示した。

○報告：奥田先生の実践の特徴

関本祐希先生

奥田先生の実践を「疑似プレイヤーを置いて生徒に社会問題を考えさせる」点に特徴があ
ると分析。奥田先生の授業は、リアルな社会問題(年金問題、流通、企業立地など)を題材
に、複数の立場を設定し、生徒に役割分担・対立と合意を考えさせる。哲学的な思考(ロー

ルズの無知のベール等)を授業設計に取り入れ、利他性・他者性を重視した学びを促進。奥田先生の教材は論文が中心。実践は長期・深掘り型で、現場での柔軟な対応力が求められる。河原先生の実践との違いとして、奥田先生は「現場での修正・深い思考」を重視。即時的な教材化は難しいが、哲学的・概念的な学びに有用であるとした。取材を通じたりアルな体験、買い物弱者問題、ドラえもんや自動運転車など多様な題材を活用。授業の導入は身近な話題から始め、最終的には深い哲学的・社会的問いに到達する設計であると説明した。

○コメント：経済教育ネットワーク代表 篠原総一先生(同志社大学名誉教授)

河原先生の教育モデルについて、20年にわたる観察と教材開発の経験を共有。河原先生とは教材開発に関して電話で頻繁に意見交換を行っていた。河原先生は、篠原先生がまとめた「誰に、何を、どのように教えるか」という教育の三要素を非常にうまく実践している。特に東大阪の中학생に対し、「なんだこれは」と興味を引くようなトピックを選び、全員が教室で前を向くような授業展開を工夫している点が決定的なポイントである。

教材は面白さや引き込み力が非常に強いが、単に興味で終わらず、河原先生自身が明かしたように、何回かに1回(3回か4回に1回程度)は教科書を徹底的に読み込ませることで深い学びも定期的に取り入れている点が重要である。これは、興味を持った生徒だけでなく、より深い学習が必要な生徒にも対応するためである。

授業の流れは、まず導入でクイズや日常生活、本などあらゆる情報源から集めた「ネタ」で生徒の興味を強く引きつけ、それを自分ごととして引き込むように工夫されている。その後、玉木先生も言及したように、河原先生のペースでネタを繰り返し使い続け、最終的に教えた内容につながるようにネタをつなげていく構造となっている。

河原先生のモデルは、概念から入るのではなく「観察から考える」ことを重視し、最終的な「着地点」(学びのゴール)を先に決めておき、そこから逆算して授業を設計する点が特徴である。生徒を誘導しつつも、必ず目標とする着地点に到達させるようにネタが仕組まれており、その「もう一步の仕上げ」が彼のモデルの真髄であると篠原先生は述べている。

教材の使い方や授業後のフォローも重要で、単発で終わらせず、30時間という限られた時間で学習を完結させるための全体の学習設計を意識する必要があると指摘した。

○後半の質疑応答、意見交流

① 社会科の深い学びと流通単元の授業

奥田先生に対し、社会科は表面的な暗記学習になりがちだが、深く学ぶことで面白さが伝わるのではないかと質問が寄せられ、奥田先生もその通りであると同意した。

奥田先生は、流通単元の授業において、流通の仕組みが「なぜあるのか」という背景や、JA・農協の役割、卸売の存在理由などを探究することで、生徒の理解が深まると説明した。教師自身が探求を続け、児童・生徒・学生と共に考える姿勢が、社会科の学びをより楽しく、深いものにする上で重要であると奥田先生は述べた。

② ロールズ哲学の入門書・授業での活用

ロールズの哲学書は難解で挫折しやすいという参加者の経験に対し、奥田先生は、まず入門的な著作から読み始め、その後で専門書に進むことを助言した。また、高校の教科書や倫理の資料集もコンパクトにまとまっており、手軽な入門書として活用できると述べた。

奥田先生は、大学で「やなせたかし（アンパンマンの作者）の正義論」を扱った授業で、学生が「正義とは何か」について深く学ぶことができた事例を紹介し、哲学的な問いが学生の深い学びにつながる可能性を示した。

③ 正解のない問いへの対応と授業展開

答えの定まらない問いを授業で扱う際の不安について、奥田先生と玉木先生が自身の対応方法を共有した。

その中で、概念形成までは正解があるが、その概念を使って社会問題を考える段階では正解がなくても良いという2段階の考え方を示した。また、答えのない問いを扱うことは、生徒が大人になったり主権者になったりした際に役立つ「考えるプロセス」を学ばせる上で非常に重要であると述べた。加えて、生徒からの質問にすぐに返答できない場合でも、授業後に生徒の回答をGoogleクラス等で読み込み、後日コメントをつけて返すことで、議論を深める方法が有効であるとした。

解決できない問題が多い現代において、「ネガティブ・ケイパビリティ」（不確実性や矛盾に耐える力）の重要性を指摘し、生徒が自ら考え、発言することの価値を強調した。

④ 教材の取捨選択と授業展開

ネタや面白い教材が授業の目標とずれる場合、使うか捨てるかの判断について質問が寄せられ、玉木先生と奥田先生が議論した。

玉木先生は、自身の経験から、授業目標の達成を重視し、足し算よりも引き算の発想で教材を選ぶ傾向が強まっていると述べた。

奥田先生は、複数クラスで授業を持つ場合、最初のクラスの反応を見て教材を調整することがよくあると語った。

また、ロールプレイングなど、学年や生徒の特性に合わせた多様な授業展開も重要であり、河原先生もロールプレイングを多く取り入れていたと奥田先生は補足した。

⑤ 生徒中心の学びの構築

玉木先生に対し、河原先生の実践をどのように発展させ、生徒中心の学びを構築しているかという質問が寄せられた。

玉木先生は、教師が「なんでだろう」という初発の問いを投げかけ、生徒に探究を促すことで、生徒が自ら面白さを見つけていくような授業を意識していると説明した。

具体的な実践例として、旅行プラン作成を通じた地理学習（関西旅行業界のプロによる外部評価）や、論争問題をAIと討論させる活動など、活動的なパフォーマンス課題を取り入れていることを紹介した。

生徒が自走できるような仕掛けを意識し、教師はエンジンをかける役割を担い、生徒が流

れに乗って自ら学びを深めていけるよう、現在も試行錯誤中であると述べた。

⑥ 米価高騰と消費者の意識

奥田先生に対し、米価高騰の背景に消費者もいるという発言の真意について質問が寄せられた。

奥田先生は、米価が15年から20年間低価格で推移してきた反動で最近高騰したのは自然なことであり、消費者がその背景にある生産現場を意識する必要があると説明した。

ウクライナ問題で小麦価格が上昇する中、米だけが上がっていなかったこと、そして「安い食品には何か理由がある」という農水省も指摘する点を消費者が理解し、米の適正価格を認識することの重要性を強調した。

奥田先生は、自身の持論として、1億2000万人の国民が農業に関心を持つ「農民」のような意識を持つことで、農業が支えられるのではないかと述べ、消費者自身が農業に関心を持つことの重要性を指摘した。

米の授業の単元位置づけについては、流通単元や政策単元で扱うことが可能であり、教科書を改めて読み直すことで、流通の仕組みやその存在理由への理解が深まると助言した。

⑦ 哲学的知識の授業での取捨選択

奥田先生に対し、多様な哲学的知識を授業で使うかどうかの取捨選択基準について質問が寄せられた。

奥田先生は、政策的議論や効率性の話題は場面に応じて選択すると述べた上で、子どもたちが「なぜ生きているのだろう」といった深い問いについて話したい瞬間があることに言及した。小学生や中学生でも哲学的な深い話は可能であると考えており、学生との深い対話の機会を重視していると説明した。

閉会

本セミナーでは、社会科教育の実践に関する多角的な議論が行われ、河原流授業づくりをはじめ、教材開発・授業展開・哲学的問いの扱い・生徒中心の学び・消費者意識の醸成など、現場で直面する課題とその対応策が具体的に共有された。今後も資料や情報交換を通じてネットワークを広げ、実践の質向上を目指すことが確認された。アンケートやQ&Aを通じて、次回以降のセミナー内容の充実も図られる予定である。

記録：行壽浩司